母のない夜

日野啓三

母のない夜　日野啓三

講談社

母のない夜

昭和五十五年三月二十四日　第一刷発行
昭和五十五年七月　七　日　第二刷発行
著　者　日野啓三
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)　振替東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定　価　九八〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

© Keizo Hino 1980, Printed in Japan

0093-168502-2253 (0)

目次

第一章　黒い音　5
第二章　枯野の子　35
第三章　血　59
第四章　遠い声　80
第五章　母のない夜　104
第六章　地下　135
第七章　谷間にて　163
第八章　光る影　193

装幀·司　修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

母のない夜

第一章　黒い音

妹から電話がかかってきたのは、妻の麗子が出かけて間もなくだった。

赤い旅行鞄を持ってやって、私はマンションの下の歩道まで麗子を送っていった。

ガスに気をつけてよ、悠太にはちゃんと食べさせて、とエレベーターの中で麗子は幾度も念を押した。銀行の通帳とハンコは確かに渡したわね、もう残り少ないんだからいい気になって使わないでよ、とも言った。わかってる、とうなずくと、麗子は丹念に口紅を塗った唇をすぼめて、いきなり舌の先を突き出した。よそゆきの化粧の下からも、もう若くなくなった皮膚の疲れが透けて見えるのに、舌だけは生き生きと桃色で、別の生きもののようになまなましかった。思わず力をこめて吸うと、両手で強く胸を押し返された。

エレベーターを出て玄関の広いホールを、麗子は浮き浮きした足取で先に立って歩いた。一週間も遊んでくるのはちょっと長過ぎるんじゃないか、と昨夜ふっと口を滑らしたばっかりに、何よ、ひとりでソウルに帰るのは日本に来てから初めてなのよ、その間の十五年間ずっとあんたたちの食事と洗濯と掃除ばかりしてきたんじゃない、一週間が何が長いのよ、もう戻ってきたくないくらいあきあきしてんだから——と目を据えてわめいたのが嘘のようだ。

タクシーに乗りこみながらも、じゃ頼んだわよ、と気恥かしくなるほどの声で叫んで手を振った。私は胸の前で格好だけ手を動かした。急いで、と麗子が言ったのだろう、タクシーは急に勢よく発車し、他の車を追い越しながらみるまに広い真直な通りを遠ざかっていった。

途中がとくに混まなければ、どうにか間に合うだろう、と私は肩をすくめた。だらしない性格ではないのに、時間だけはひどくルーズだ。日本に来ていろんなところが変ったが、決まった時間に自分を合わせられないのは、十五年前ソウルで知り合ったころと変らない。たまに友達と外で会うときも、出かけていったあとから必ず、もう三十分も待っているんですが、と電話がくる。もう着くと思いますが、すいません、と何度謝ったかわからない。飛行機も出発の時間ぎりぎりになって、離陸を十五分、二十分と遅らせたことが、私の知っているだけでも二度はあっ

た。

七階に上がって家に入ると、居間のソファーにガウンが脱ぎすてられ、床には麗子が昨夜から髪を巻いていたヘアカーラーが幾つも転っていた。食卓の上には朝食のあとがそのままだ。壁の時計を見上げながら私が幾度せきたてても、床の絨毯に坐りこんで悠々と化粧していた化粧品のにおいが、室内に濃くにおっていた。

だが、もう何日もいなくなるのだな、と気づくと、にぎやかにちらかっているはずの家の中が急にがらんとして感じられた。しばらく居間の真中にぼんやりと立っていた。家といっても、厚いコンクリートの壁で仕切られた箱に過ぎないのだということが、初めて気がついたようにまざまざと感じられた。ベランダに出るガラス戸の外には、九月半ばという季節には珍しく、低く雲の垂れこめた空が、あたりのビルの連なりとそっくりの鈍い灰色に澱んでいた。

悠太が生まれるときも、しばらく麗子が入院していたが、十二年前の記憶は薄れきっている。郊外の団地にいたころ、まだ小さかった悠太を連れて、麗子が何度か里帰りしたはずだが、そのときの記憶もあいまいだ。だが六年前にこの都内のマンションに移ってから間もなく、麗子が脚の関節の手術で一ヵ月近く入院したときのことは覚えている。何日か家政婦を頼んで家の中の掃

除をしてもらって、ガラス戸はピカピカに光り絨毯もきれいになったが、それでも家中が冷え冷えとして、そこらじゅうに目に見えないざらざらの埃が降り積もり続けている感じがした。新聞社の勤めからも早く帰ってできるだけ悠太の相手をしたのだが、何かの拍子にふたりとも黙ると、すぐ下の通りを夜更けても車が行交っているにもかかわらず、遠くビルのネオンが連なる空と街の境い目まで、しんと静まり返る冷え冷えとした気配が張りつめるように思われた。

といって、麗子が退院してくるとまた同じように、些細なことで言い争った。ついさっきまで上機嫌に笑っていた麗子の顔が、ちょっとしたことで険しくひきつって、自分が口にした言葉でさらに亢奮する。小さかったときはその度に怯えて、ふたりの顔をおどおどと見比べていた悠太も、そのうち言い争いが始まると、わざとのように本を読み始めるか、紙片やプラスチック材で模型を作って、関係ないという顔付になる。それでも息子が耳だけはすまして私たちの言葉の端端まで聞きとっているのを私は知っているので、口の利き方も多少は気をつけるのだが、麗子の方はソウルに帰る、アメリカに行ってしまうというようなことも、平気で口にした。

夏の終りごろに山陰の都市で私の小学校の同窓会があった。その帰りに広島県の田舎に住む私の老父母のところへまわるつもりにしていたのだが、出発前になって、急に麗子が反対し始め

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

た。悠太が生まれるときも、その前に東京に来たばかりの麗子を狭いアパートに残して私が半年ほどベトナムに特派員に出た留守の間も、全然見向きもしなかった親のところに、どうして毎年の夏休みに出かけてゆくのか、それは裏切りじゃないのか、血のつながりとわたしたち家族と一体どっちが大切なのか、とまくしたてられて、とうとう私は山陰まで出かけながら真直に帰ってきた。

そのあとに麗子がひとりでソウルに行ってくる、と言い出したのだった。九月半ばに日本のお盆に当たる秋夕（チュソク）という祭りが韓国にある。親族が集って先祖の霊を祭り、墓地にもお参りする。ソウルからずっと離れている田舎の墓地までは行けなくても、きょうだいの誰かの家ですでに亡くなっている父母のお祭りをしたいというわけだった。

わたしは日本に来るとき、あなただけを信じて親もきょうだいも友達も捨てたつもりだったのに、このところ毎年のように郷里に行き、きょうだいたちのことを気にするあんたを見ていると、わたしだけ損してるみたいじゃないよ、と麗子は目尻を震わせて言った。

じゃ二日もあればいいじゃないか。

折角ひとりで行くんだから、昔の友達と会って遊んでくるわよ。いままで悠太を連れて帰った

ときは、思いきり友達と遊ぶ時間なんか全然なかったのだから。

でも悠太には日曜もなしに受験勉強をさせておきながら、親が思いきり遊びにゆくというのか。

わたしだって、毎日こんな生活で息がつまりそうなのよ、一日ずつ心が死んでゆくみたいなのよ。どうしてそれがわからないのよ。

わかってるさ、と私は低く呟く。

だが心の奥では割り切れない思いが、ずっと続いている。麗子の勝手な理窟に対する反発でもあり、ある意味ではもっともな彼女の心事を素直に認められない自分自身の中の固い膜のようなものに対する苛立ちでもあった。自分でもよくわからない痼(しこ)りが、心の奥に暗く執拗に根を張っている。

軽く頭を振って食卓の上の食器を流し台に運んで洗い始めた。新聞社は午後から出社する番だった。食器を片付け、部屋の中をひと通り掃除してから出かけようと考える。

流し台の前の小窓から、悠太の通っている小学校の校庭と校舎が斜め下に見える。六年生の教室は三階である。だが、教室の内側は薄暗くて見えなかった。硬質ラバーを敷きつめた校庭で、

低学年が体操をしていた。教師が吹く笛の音が、ピッピッと間をおいて聞えた。

そのとき電話が鳴った。

どうして電話の音は、びくっとさせるのだろう。とくにひとりでいるときに。悪い電話を恐れているのではない。自分を部屋の中、あるいは家の中一杯にひろげて、いわば壁を自分の外壁にしてその内側でしどけなく気分を漂わせているとき、電話の音は壁を勝手に通り抜けて、いきなり自分の内部深くに刺しこんでくる。無礼で不快だ。

反射的に自分の輪郭を体の形にまで収縮して身構えるような気分で、居間の隅で鳴っている受話器を振り返った。自分でもよくわからないのだが、急に電話の音を聞いた瞬間、黒光りする受話器が浮ぶのである。私の家の受話器は引越してきたときから、草色の中間色で、ベルの音も最も小さく調節してある。それなのに、真黒な受話器がけたたましく鳴りひびいた気がした。

細長く彎曲した脚つきの台の上で、受話器は三度四度と断続して鳴り続けた。意識して聞くと、むしろ澄んで控え目な音である。床の絨毯と同じ穏やかな草色の受話器。だがいやな感じがした。悪い電話のかかってくる予想があるのではない。予想しうる最も悪い電話は、八十歳にな

る老父の身に何か起こったしらせだろうが、そういう現実的な種類のいやな感じではなかった。妻があわただしく出かけて、鉄筋コンクリートの地肌めいたものが露わになったような剝き出しの気分の肌に、じかに何かが触れてくるような怯えだ。

いまはひとりでいたかった。まわりから、自分の中から露わになってくるものと、狎れ合うように触れ合っていたい気分だった。濡れた手も拭かないで立っていた。だが受話器は五度六度と執拗に鳴る。軽く舌打ちして濡れた手のまま食卓をまわった。

受話器を取り上げると、兄貴？　というひどく弱々しい女の声がした。郊外の団地に住んでいる下の妹の声だ。ああ、とわざと不機嫌な声で答えた。ジーッと低く電流の流れる音がする。何の用だ、と私の方から尋ね返した。だが妹は答えない。もう一度、どうしたんだ、とじりじりして言った。

死んじゃったのよ。

と細い声が呟くように言った。ひどく遠くにある薄暗い箱の中で虫ほどに小さい女が、黒っぽい板の間の隅にぺたりと坐りこんで、俯いたまま、ぼそりと独り言を言ったようだった。

誰が、死んだんだ、と聞き返した。

死んじゃったの、と同じような調子で妹は繰返した。箱の中の小さな女の姿がもっとはっきりした。長い黒い髪を切りそろえて、十二単衣のような古風な着物の裾が、剝き出しの板の間に流れている。古い朽ちかけたお堂の感じで、かすかに盛り上がった板の木目の、歪んだ同心円の模様が見えた。板か落葉の腐るかすかに甘味を含んだいがらっぽいにおいがする。

どうしてそんなイメージが浮んだのかわからない。妹は古風な女でもなく、和服が好きでもないのに。むしろ派手好きで気取ったところがある。

洋一が死んじゃったの、いま死んだのよ。

どうして？　何で死んだんだ。

私はひどく遠くの、いまにもかき消えそうな影に向って叫ぶように言った。掌についていた洗いものの水が、つーっと手首を伝ってシャツの内側に流れていった。

何の病気だ？

首に紐を巻きつけて死んでたの。

自殺か、と私は怒鳴ったが、自分の口にした言葉に少しも現実感がない。何かの符牒か番号の数字でも口にした感じだった。

わかんないの、でも死んじゃったのよ。

いぜんとして遠い薄闇を隔てて、ばらばらに呟いたり叫んだりしている気がする。闇のあちこちで地虫がすだくように、ジーッという電流の音が耳一杯に聞える。

どうしていいかわかんないの、すぐ来てね。

ぽつんとそれだけ言うと、受話器を置く音がしてラインが切れた。

電話台はベランダに出る三枚続きのガラス戸のはずれのすぐ内側に置いてある。受話器をゆっくりと置くと、ガラス戸の方を向いていた顔と体の向きをそのままにして、食卓の椅子をひとつ引き寄せて坐った。ガラス戸とベランダの手すり越しに、下の通りの一部が見える。オレンジ色のタクシーが一台ひどくのろのろと動いていた。歩道を赤っぽいネッカチーフを頭にかぶった女のひとが、低い自転車をこいでゆく。その動きが妙にギクシャクとぎごちなく見えた。自転車は危いな、とぼんやり思った。

しばらくして交通事故じゃなかったんだ、と気付いた。

私の父母も弟妹三人も健在である。父方母方双方の祖父は、私たち家族がまだ朝鮮に住んでい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.